



Title	視線行動が印象形成に及ぼす影響 : 3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割
Author(s)	磯, 友輝子; 木村, 昌紀; 桜木, 亜季子 他
Citation	対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 87-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

視線行動が印象形成に及ぼす影響¹⁾²⁾

—3 者間会話場面における非言語的行動の果たす役割—

磯 友輝子(大阪大学大学院人間科学研究科)

木村 昌紀(大阪大学大学院人間科学研究科)

桜木 亜季子(大阪大学大学院人間科学研究科)

大坊 郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、同性の3者間会話場面において、視線行動が会話者間の印象形成に与える影響を検討した。面識度の低い48人の大学生(男性18人、女性30人)が、互いに親くなる会話(親密条件)か、社会的問題について議論する会話(討論条件)のいずれかに参加した。視線量が多く、かつ配分のズレが少ない場合に好印象を獲得するという仮説はいずれの印象評定項目においても支持されなかった。しかしながら、討論条件において視線量が多い場合に好意的な印象を獲得する傾向が見られ、均等な視線配分が感じの良いという印象につながるが見出された。また、非言語的表出性が高いほど話題条件にかかわらず視線行動を調節する傾向が見られた。以上の結果に基づき、発話との対応において視線行動の持つ機能を明確にする必要性が議論された。

キーワード:3者間会話場面、視線行動、印象形成、会話満足度

問題

どのようなコミュニケーションを行えば、他者に良い印象を与えることができ、快適な対人関係を保つことができるのだろうか。上記のような課題を掲げコミュニケーション行動の様相や対人認知を検討することを目的とした研究の中で、2者間会話場面を扱ったものは多いが、3者間会話場면을対象としたものはあまり見受けられない(e.g., 大坊, 1978)。しかしながら、日常生活において相互作用の相手は1人とは限らず、集団内で協調して何らかの成果を求められる場面も多い。それゆえ、集団の最小単位である3者集団の中でみられる対人行動、そしてそれによる影響過程に関する基礎的データを収集することは、実社会の場での円滑なコミュニケーションの促進に役立つものと思われる。

2者間会話では会話者の示す言語・非言語的行動のバランスが対人印象やコミュニケーション行動に関連することが示されているが(e.g., Argyle & Dean, 1965; 小川, 2000)、3者間会話では直接的に形成される印象の他に、もう1人の会話者を介したメタ認知も関連するため、配慮行動やコミュニケーション配分が重視されることが予想される。Patterson(1983)は、複数人の相互作用では相互交渉部分の重なりが許容されるように身体向きを調整することを指摘している。つまり、2者間に比べて3者以上の相互作用では共有される場の境界が曖昧になり、積極的な介入を示さなければ場から排斥されてしまう可能性を含んでいるのである。また、2者間と3者間では共有空間に関連する身振りの表出形態に差異があることや(Özyürek, 2000)、3者間会話では相互作用に2人対1

人の勢力関係が生じる(大坊, 1978; Mills, 1953)などのような2者間会話場面とは異なる特徴が見出されている。特に、遠慮と察しの文化的規範が含まれ(石井, 1987)、高コンテクスト文化(Hall, 1976)であると指摘されることが多い日本では、人と人との「間」の数が増える3者間会話場面において配分やズレといったコミュニケーション行動の調整がより重要になるであろう。

本研究では3者間会話場面对人認知の関係を示す非言語的指標として、視線行動に注目する。視線は対人場面でフィードバック機能を果たしたり、説得場面で表出される場合には信憑性を高めたりするなど、コミュニケーション場面で重要な役割を果たす(Argyle, 1988)。Kendon(1967)は視線行動には以下の3つの機能があるとしている。発話を終えるべきかどうかについて聞き手の凝視が自分に向けられているかどうかで確認するモニタリング機能、会話の好ましさを相手の目の動きで察知し、相手の興味を引くように調整する機能、さらに会話がプラスあるいはマイナスの効果をもたらしているのかを相手に知らせる無言の表出機能の3つである。また、特に、聞き手による視線は関心や意欲、発話の促進として働くことが指摘されている(Argyle & Cook, 1976)。しかし、聞き手の視線によるフィードバック機能だけでなく話し手の視線によるフィードバック機能も同じくらい重要であるという指摘もある(Lesko & Schneider, 1978)。したがって、話し手の立場にあっても聞き手の立場にあっても、視線を向けて会話への積極的参加を示すメンバーは他のメンバーから好印象を抱かれたり、会話の満足感が高まることが予測される。同時に、他のメンバーが視線を向けて会

話への積極的参加を示してくれることでも会話満足感が高まることが予想できるだろう。会話の満足感ではないが、Lesko & Schneider(1978)では承認機能において他の会話者への波及効果を示している。実験協力者 2 人、実験参加者 1 人という 3 者間会話場面において、1 人の実験協力者が聞き手に置かれた時の視線レベルを 3 段階に操作すると、最も凝視レベルが高い際に、凝視レベルを操作した実験協力者からだけでなく、操作を行っていない実験協力者からも承認されているという評価が高く得られている。つまり、その場に居あわせた会話相手の視線行動に関連なく、別の 1 人の視線行動から承認を得られると、3 者全体として承認が得られたと知覚するのかもしれない。ただし、Lesko & Schneider(1978)では、視線を操作した実験協力者と実験参加者の発話の順番も操作されていたため、視線レベルと発話順序のどちらの効果が有効であったのかは判別できない。

以上のことから、3 者間会話場面では聞き手として視線を向ける相手が 2 人存在することから、視線行動が好印象や会話の満足度へとつながるプロセスはより複雑になるものと思われる。すなわち、単純な表出量の多さが好印象に結びつくとは限らない。3 者間会話では 1 人への傾聴だけでなく、2 人への視線配分を考慮する必要がある。そこで、本研究では視線量が多く、かつ配分のズレが少ない場合に好印象を獲得するという仮説を検討する。

また、会話の話題内容によって非言語的行動の表出が異なるとされる(Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe, 1996)。視線行動に関しては、表出した視線が相手にどのような影響を与え、さらにそれによる対人関係の変化の捉え方が、場面とパーソナリティの組み合わせによって異なることが指摘されている(Exline, 1963)。したがって、話題に応じて、視線行動が他者からの印象に影響を与える傾向も異なるのかもしれない。

さらに、話題が異なれば、状況を察したり、行動を統制する社会的スキルの関連性も無視できない。しかも、上述したように、特に 3 者場面では、遠慮や察しなどの日本的な文化的規範を反映した社会的スキルが要求されるものと思われる。同時に、複数者の会話場面の中で積極的な介入を示すために表出性の高さも求められるだろう。そこで、本研究では、社会的スキル尺度に日本的な対人コンピテンスの測定する日本語版 JICS を使用し、積極的な介入を示す指標として日本語版 ACT 尺度を用いて、視線行動と社会的スキルとの関連について検討する。話題にかかわらず、非言語的表出性の高い者は視線量が多く、社会的スキルの高い者は視線行動の配分にも気を配ることが予想される。

したがって本研究では、まず視線量が多く、かつ配分のズレが少ない場合に好印象を獲得するとした仮説の検

討を行い、視線行動と社会的スキルとの関連性についても考察する。

方法

実験参加者

講義中に募集した大学生 72 名(男性 24・女性 48 名、平均 19.99 歳、 $SD=1.17$)を同性 3 名の組みにした。会話中の話題条件として社会的な問題について話しあう討論条件と、互いを知り合えるように会話をする親密条件を設けてランダムに振り分けた。その結果、討論条件は 14 組(男性 4・女性 10 組)、親密条件は 10 組(男性 4・女性 6 組)であった。このうち、面識度の低い(つまり、初対面あるいは顔は見たことがあるが話をしたことがない)16 組(討論:男性 3・女性 5 組、親密:男性 3・女性 5 組)を分析対象とした。

質問紙

会話前あるいは会話後に実験参加者には以下の質問紙に解答させた。(1) 日本的対人コンピテンスを測定するための日本語版 JICS(5 件法; Takai & Ota, 1994)。(2) 非言語的表出性を測定するための日本語版 ACT(9 件法; 大坊, 1991)。(3) メンバー 2 名に対する印象評価 7 項目(感じの良い・悪い、健康的な・不健康な、外向的な・内向的な、まじめな・ふまじめな、しっかりした・たよらない、話しやすい・話しにくい、話がうまい・へたな; 7 件法)。このうち、6 項目は大坊(1978)の対人印象評価の 6 因子から、因子負荷量を考慮して各因子 1 項目ずつを選択した。なお、各評価項目は数値が高いほど、感じの良い、健康的な、外向的な、まじめな、しっかりした、話しやすい、話がうまいことを示す。(4) 会話満足度 3 項目(協力的に会話が進んだ、会話はしにくいものだった、相互に興味をもって会話できた; 8 件法)。(5) メンバー 2 名に対する会話行動評価 3 項目(会話を上手く調節していた[調節]、好意的に話していた[好意]、興味をもって話していた[興味]; 8 件法)。なお、(4)および(5)は、木村・余語・大坊(2002)のラポール測定項目を改変したものである。(6) 実験参加者との面識の程度を問う質問。5 つの選択肢(初対面である、顔は見たことがある、あいさつをかわす、日常的な話しをする、個人的な問題まで話すことがある)から 1 つを選択させた。この他、会話行動についての自己

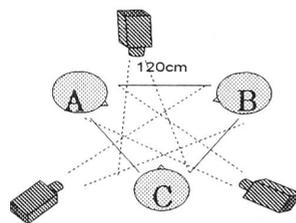


Figure 1 実験状況

評価、会話中に重要視する役割などに関する質問項目にも回答を求めた。(1)(2)は会話前、(3)・(6)は会話後に実施した。

手続き

会話開始前の相互作用が印象やコミュニケーション行動に与える影響を回避するために、3名の実験参加者は異なる控え室に召集された。女性の教示者が、実験参加者を控え室から個別に実験室へ案内し、実験室内の分割ブースで質問紙に回答させた。この際、討論条件では、14の社会的な問題(e.g., クローン研究の人間への適用)についての関心度を尋ねる質問紙(磯・大坊, 2003)にも回答させ、共に関心の高い話題1つを討論のテーマとした。その後、教示者が実験室内の3角形の頂点上に置かれた椅子に誘導した(各120cm間隔、Figure 1)。実験参加者の着席後、ヘッドセットの装着を求め、口頭で会話の進め方などの教示を行った。両条件共に会話時間は18分間であった。実験室には実験参加者各々が視線を大きく動かさない範囲で会話時間を確認できるよう、2台の掛け時計を設置した。

3台のカメラで各実験参加者を撮影し、ビデオミキサーで合成してデジタル・ビデオテープに録画した。映像には座位で膝上から頭部が納まるようにして撮影した(Figure 2)。同時に、各実験参加者の音声は独立トラックでMD-dataにも録音した。実験の開始と終了の合図は隣の操作室からブザーで知らせた。会話終了後、残りの質問紙およびデータ使用についての同意書に記入を求め、ディブリーフィングをして終了した。



Figure 2 実験場面の録画画像

結果と考察

統計的分析にはPC-SASパッケージを使用した。

指標の作成

視線評定量 非言語的行動のコーディングを訓練されている3名の評定者が、録画画像(Figure 2)をもとに各実験参加者が2人の会話メンバーに視線を向けている程度を会話前期・中期・後期(各6分)について7段階で評定した。評定者間の評定値には比較的強い有意な相関係数が得られたため(評定者2名の組み合わせで $r=.43, .54, .69$, すべて $p<.001$)、3名の評定値を平均し

て各実験参加者の会話前期・中期・後期の視線評定量とした。実験参加者ごとに各メンバーへの会話全体の視線評定量を算出し、両メンバーへの視線評定量を合わせて視線評定総和とした($M=23.67, SD=4.19$)。また、両メンバーへの視線評定量の差分の絶対値を両メンバーへの視線評定量の和で除算することで視線量の個人差を統制し、標準化した視線配分ズレを算出した($M=0.09, SD=0.10$)。たとえば、Figure 1においてCの視線配分ズレは、 $| (CのAへの視線評定量) - (CのBへの視線評定量) | \div [(CのAへの視線評定量) + (CのBへの視線評定量)]$ で算出される。以上の手続きにより算出した視線評定総和でH群($n=24, M=27.07, SD=2.24$)、L群($n=24, M=20.28, SD=2.62$)、視線配分ズレでH群($n=24, M=0.16, SD=0.11$)、L群($n=24, M=0.03, SD=0.02$)の2群に分けた。なお、2要因の組み合わせでは、視線評定総和H-配分ズレH群 $t=6$ 、視線評定総和H-配分ズレL群 $t=7$ 、視線評定総和L-配分ズレH群 $t=8$ 、視線評定総和L-配分ズレL群 $t=3$ となり、分析対象指数に偏りが見られるため、以降で行う共分散分析の結果の考察には注意を要する。

従来、女性は男性よりも相手に視線を向けるというような性差が指摘されている(e.g., Arglye & Ingham, 1972)。そこで、性別による視線行動の表出への影響を見るために、性別を独立変数とし、視線評定総和、視線配分ズレを従属変数としたt検定を行った。その結果、視線評定総和については性別による差はなかったが(男性 $M=23.06, SD=4.18$, 女性 $M=24.05, SD=4.22$; $t=1.04, n.s.$)、視線配分ズレについては有意な性差が見られ、女性よりも男性のほうが大きな配分のズレを示した(男性 $M=0.11, SD=0.09$, 女性 $M=0.08, SD=0.10$; $t=2.90, p<.01$)。したがって、以降の分析はすべて性別を統制して行った。

快印象総和の算出 全体的な印象の良さを捉えるために、7項目の印象評定項目のうち外向的・内向的を除いた、快方向性を有する6項目の α 係数を算出した。その結果、 $\alpha=.71$ と比較的高い値が得られたことから、6項目を合計して快印象値とするのに差し支えないと判断した。

さらに他の会話メンバー2者からの快印象値を合計して快印象総和とした。また同一人物への各印象で相関係数を求めたところ、話しやすいを除いて類似した印象を抱く傾向が認められた(感じの良い $r=.33$, まじめな $r=.33$, しっかりした $r=.34$, いずれも $p<.05$, 健康的 $r=.38, p<.01$, 外向的な $r=.48$, 話しがうまい $r=.49$, いずれも $p<.001$, 話しやすい $r=.20, n.s.$)。各印象評定項目についても会話メンバー2者から得られた評定の総和を算出した。

Table 1 視線評定総和群と視線配分ズレ群の印象評定、会話行動評価の平均値(標準偏差)および共分散分析結果

	討論条件						交互作用	親密条件					
	視線総和			視線配分ズレ				視線総和			視線配分ズレ		
	H群 (n=11)	L群 (n=13)	主効果	H群 (n=10)	L群 (n=14)	主効果		H群 (n=13)	L群 (n=11)	主効果	H群 (n=14)	L群 (n=10)	主効果
快印象総和	65.55 (5.61)	59.54 (5.72)	13.11 **	62.90 (8.54)	61.86 (8.90)		65.38 (6.52)	61.82 (6.41)		61.50 (8.67)	66.90 (8.13)		
感じの良い	11.36 (1.29)	10.08 (1.55)	5.42 *	10.50 (1.82)	10.79 (1.68)		11.85 (1.78)	11.73 (1.42)		11.43 (1.55)	12.30 (1.89)	5.16 *	
健康的な	10.27 (1.35)	9.92 (1.61)		10.00 (2.73)	10.14 (2.63)		10.54 (1.49)	10.09 (1.51)		9.71 (2.84)	11.20 (2.15)		
外向的な	9.45 (2.16)	9.31 (2.66)		9.80 (2.76)	9.07 (2.32)	4.19 †	10.15 (2.04)	8.18 (2.64)		8.86 (2.74)	9.80 (2.70)	4.41 *	
まじめな	11.82 (1.72)	11.77 (1.42)		12.10 (2.01)	11.57 (1.70)		10.23 (1.45)	10.45 (1.60)		10.36 (1.86)	10.30 (1.89)		
しっかりした	11.36 (1.12)	9.46 (2.22)	13.51 **	10.40 (1.61)	10.29 (2.37)		11.08 (1.71)	10.00 (2.27)		10.07 (2.13)	11.30 (1.70)		
話しやすい	10.82 (1.25)	9.31 (2.02)	4.12 †	10.60 (1.99)	9.57 (2.09)		10.85 (1.84)	10.18 (1.79)		10.00 (1.80)	11.30 (2.16)	6.63 *	
話がうまい	9.91 (1.64)	9.00 (1.73)	3.33 †	9.30 (2.03)	9.50 (1.43)		10.85 (2.16)	9.36 (1.40)	4.00 †	9.93 (1.90)	10.50 (1.96)	3.03 †	
調節	11.91 (2.26)	9.54 (3.50)	4.68 *	12.30 (2.33)	9.43 (2.16)	6.12 *	12.08 (3.30)	10.36 (2.56)		10.71 (2.30)	12.10 (2.33)		
好意	13.36 (1.96)	11.38 (2.69)	8.17 *	13.00 (1.94)	11.79 (2.11)		13.62 (2.21)	13.55 (2.73)		13.43 (1.95)	13.80 (2.10)		
興味	12.55 (2.66)	11.54 (3.07)		12.10 (1.88)	11.93 (1.97)		13.23 (2.81)	11.45 (3.02)	8.08 *	12.21 (2.29)	12.70 (1.83)	8.25 **	
会話満足度	17.91 (2.51)	13.92 (5.87)	8.43 **	18.10 (2.96)	14.07 (3.29)	7.75 *	15.39 **	17.62 (2.64)	18.64 (5.64)	17.14 (3.06)	19.40 (2.76)	3.53 †	

主効果、交互作用は話題別に性別を共変量とした視線評定総和と視線配分ズレの共分散分析の結果で、数値はF値($F(1,19)$)である。ただし、有意な効果が得られたもののみ掲載した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

視線評定総和と視線配分ズレが印象形成に与える影響

視線評定総和とH・L群、視線配分ズレH・L群における各印象評定値および快印象総和、会話行動評価、会話満足度の平均値および標準偏差をTable 1に示した。Table 1の主効果、交互作用は、各印象評定および会話行動評価を従属変数として視線評定総和H・L群×視線配分ズレH・L群の性別を共変量とした共分散分析で有意な効果が得られたF値を示した。また、各印象評定および会話行動評価と、視線評定総和、視線配分ズレとの性別を統制した偏相関係数をTable 2に示した。

快印象総和への影響 話題条件および性別を統制した実験参加者全体における快印象総和と視線評定総和との偏相関係数分析(Table 2)においては有意な関連性が示されたが($r = .45$, $p < .01$)、視線配分ズレとの偏相関係数は有意ではなかった。また、話題条件に分けて検討した場合には、討論条件において視線評定総和との間においてのみ比較的強い有意な関連性が示された($r = .64$, $p < .01$)。以上のことから、快印象を抱くかどうかには、視線配分のズレの少なさよりも視線量の多さに重きが置かれることが示唆された。

しかしながら、本研究で提示した仮説は、単に視線量の多さだけで示されるものではなく、配分のズレの少なさの効果も考慮に入れ、両者の交互作用で示すことができ

る。すなわち、視線評定総和とH・視線配分ズレL群が最も高い評定値を得ることで仮説が支持されるだろう。そこで、話題別に、快印象総和を従属変数とし、視線評定総和と視線配分ズレを独立変数、性別を共変量とした共分散分析を行った。その結果、討論条件では、視線評定総和の主効果は有意であり($F(1, 19) = 13.11$, $p < .01$)、視線評定総和H群は、L群よりも高い快印象評定値であった(Table 1)。しかし、視線配分ズレおよび視線評定総和と視線配分ズレとの交互作用は有意ではなかった(Table 1)。また、親密条件においてはいずれの主効果、交互作用も有意ではなかった。したがって、会話メンバーから好印象を受けるかどうかは視線量の多さに依存し、それは討論条件においてのみ見られる傾向であることが示された。

各印象評定項目への影響 ポジティブ方向を有する印象次元でも、すべてが快印象総和と同じような偏相関係を示すわけではなく、話題条件によっても諸相が異なっていた(Table 2)。感じの良さについては、視線量が多いほどその印象評定値は高くなり($r = .51$, $p < .05$)、また配分のズレが大きいほど評定値が低くなっており($r = -.49$, $p < .05$)、その傾向は討論条件においてのみ認められた。しっかりしたという印象は討論条件のみにおいて視線評定総和との有意な正の偏相関係数が得られていたが($r = .67$, $p < .01$)、外向的な($r = .37$, $p < .10$)、話がうまい

Table 2 視線評定総和と配分ズレの偏相関係数

	視線評定総和			視線配分ズレ		
	全体	討論	親密	全体	討論	親密
快印象総和	.45 **	.64 **	.22	-.21	-.08	-.20
感じの良い	.33 *	.51 *	.04	-.41 **	-.49 *	-.15
健康的な	.23	.27	.20	-.08	.01	.10
外向的な	.23	.13	.37 †	.09	.25	-.04
まじめな	-.03	.11	-.17	.02	.13	-.18
しっかりした	.46 ***	.67 ***	.19	.03	.14	-.09
話しやすい	.29 †	.33	.20	-.24	-.04	-.29
話がうまい	.32 *	.30	.36 †	-.11	-.04	-.15
調節	.36 *	.39 †	.31	.01	.29	-.49 *
好意	.28 †	.50 *	-.16	.10	.18	-.01
興味	.17	.13	.28	.01	.07	-.14
会話満足度	.41 **	.61 **	-.04	.23	.40 †	-.04
ACT	.16	.24	.16	.27 †	.38 †	.27 †
JICS						
察し能力	-.02	-.11	-.21	.11	.04	.11
自己抑制	.02	.13	.22	-.04	.03	-.04
上下関係	.18	.02	.18	-.13	.06	-.13
対人感受性	.09	.14	.09	.12	.08	.12
不明瞭さ耐性のなさ	.19	.28	.19	.21	.36 †	.21

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$ 全体 $N=48$ 討論条件 $N=24$ 親密条件 $N=24$
 数値は、実験参加者全体では話題条件および性別を統制した偏相関係数、討論・親密条件では性別を統制した偏相関係数を示している。

($r=.36$ $p < .10$)はそれぞれ親密条件において有意傾向の偏相関係数を示していた。したがって、討論条件では、視線量が多いほど感じがよく、しっかりしたという印象が抱かれるが、会話メンバー2人に対しての視線の配分が偏っていると感じが悪いという印象を抱かれることが示された。一方、親密条件では視線量の多い人は外向的で、話がうまいという印象が抱かれる傾向が示された。

印象評定項目についても快印象総和と同様にして共分散分析を行った(Table 1)。討論条件では感じの良い($F(1, 19)=5.42$, $p < .05$)、しっかりした($F(1, 19)=13.51$, $p < .01$)において視線評定総和の主効果が得られ、話しやすいと話がうまいにおいて有意傾向であった(順に $F(1, 19)=4.12$, 3.33 , $p < .10$)。すなわち、メンバーに視線を多く向ける人ほど感じが良く、しっかりしていて、話しやすく、話がうまいという印象が抱かれていた。交互作用は外向的において有意傾向にとどまり($F(1, 19)=4.19$, $p < .10$)、視線配分ズレの主効果は見られなかった。

一方で、親密条件では、視線評定総和の主効果は話がうまいにおいて有意傾向のみであり($F(1, 19)=4.00$, $p < .10$)、感じの良い、外向的な、話しやすいにおいて有意な交互作用が(順に $F(1, 19)=5.16$, 4.41 , 6.63 , $p < .05$)、話がうまいにおいて有意傾向の交互作用が得られた($F(1, 19)=3.03$, $p < .10$)。しかしながら、それらの交互作用は、視線評定総和が多かつ視線配分のズレの小さい群が他の群よりも最も高く評価を受けると予測していた仮説を支持する結果ではなかった(Figure 3)。感じの良さや話しやすいについては視線量もズレも少ない、すなわち、両メンバーに対して全体的にあまり視線を向けていない場合に、高い評定値を得ている。初対面場面で互いに知りあうように会話する親密条件では、直接的な視線行動を

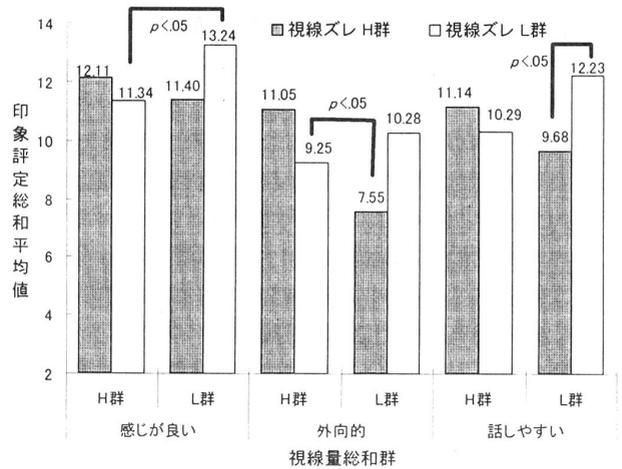


Figure 3 親密条件における視線評定量総和群と視線配分ズレ群の感じの良い、外向的、話しやすいの平均値

避けることが求められるのかもしれない。

会話行動評価への影響 印象評定と異なり、会話中の行動を具体的に評価した会話行動評価の結果は、より話題の特質に関わる形で現れたといえよう。討論条件では、視線評定総和と調節($r=.39$)の偏相関係数が有意傾向にあり、好意($r=.51$)との間で5%水準の有意な偏相関係数が得られた(Table 2)。一方、親密条件では視線配分ズレと調節に負の有意な偏相関係数が認められた($r=-.49$, $p < .05$)。

共分散分析の結果(Table 1)では、討論条件の調節と好意(順に $F(1, 19)=4.68$, 8.17 , $p < .05$)で視線評定総和の有意な主効果が得られ、調節には視線配分ズレの有意な主効果も得ていた($F(1, 19)=6.12$, $p < .05$)。一方、親密条件では、偏相関係数では有意な関連性は見られてはいないが、興味において視線評定総和の主効果と視線評定総和($F(1, 19)=6.08$, $p < .05$)と視線配分ズレの交互作用($F(1, 19)=8.25$, $p < .01$)が有意であった。しかしながらこの交互作用も仮説とは異なる傾向であり、多重比較の結果、視線評定総和 H-配分ズレH群($M=13.83$, $SD=1.47$)は視線評定総和 H-配分ズレL群($M=12.71$, $SD=2.14$, $p < .05$)や視線評定総和 L-配分ズレH群($M=11.00$, $SD=2.07$, $p < .01$)よりも興味をもって話していたと評定されていた。

以上の結果から、討論条件では会話メンバーを良く見る人ほど、その一方で2者への視線の配り方に差をつけた人ほど会話をうまく調整していると評価され、視線量が多ければ好意的に話していると評定されることが示された。親密条件では視線量の多さは興味の表れとして捉えられ、視線を2者に均等に向けることが会話の調節に貢献していると評定されることが示唆された。

社会的スキルと視線配分との関連性

非言語的表出性の高い者ほど視線量が多く、社会的スキルの高い人ほどより視線行動をモニタリングや調節の道具として用いることが予測できる。そこで、表出能力および社会的スキルと視線行動について検討するため、ACT($\alpha=.73$)、JICS(下位尺度で $\alpha=.73-.43$ の値)各々の尺度で単純加算値を算出し、視線評定総和、視線配分ズレとの性別を統制した偏相関分析を行った(Table 2)。しかしながら、予測に反し、親密条件の視線配分ズレが両条件のACT尺度との間で、討論条件のJICSの不明瞭さへの耐性のなさとの間でそれぞれ有意傾向の関連性を示したのみであった。予測したような社会的スキルの効果は明確には得られていないが、有意傾向であるため強調はできないものの、非言語的表出性が高い人ほど、どのような話題であっても、視線の向け方に変化をつけて表出する傾向が見られた。ACT尺度は解読能力との有意な関連性が指摘されていることから(大坊, 1991)、状況に応じてコミュニケーションを解読し、視線行動を調節したものと考えられよう。また、討論条件では結論に向かって議論を発展させるためには曖昧さを排除する必要がある。そのような社会的スキルが視線行動を弁別的に用いるという傾向に表れたのかもしれない。

会話満足度と視線配分との関連性

行動の表出は他者への影響のみでなく、表出者自身の会話の満足度にも影響を与えることも考えられる。そこで、会話満足度(3項目 $\alpha=.75$)と視線評定総和、視線配分ズレとの性別を統制した偏相関分析を行った(Table 2)。討論条件のみにおいて、視線量を多く表出し($r=.61, p<.01$)、視線配分にズレが多くなるほど($r=.40, p<.10$)、

会話に対する満足度が高くなることが示された。また会話満足度と社会的スキルとの関係についても調べたところ、表出性の高い者ほど会話に対する高い満足感を得ていたことが示された($r=.48, p<.001$)。一方、JICSと会話満足度には関連がみられなかった。以上のことから、非言語的表出能力が高い人ほど話題に応じて視線を調節し、それが会話の満足度につながったものと考察できる。

視線配分と印象形成および別の人物からの印象形成

上記の分析において、視線量が多く、かつ配分のズレが少ない場合に好印象を獲得するとした仮説は支持されなかった。しかしながら、視線量が多いほうが好印象を得ているものの、感じの良さや調節においては話題によって視線行動の配分を均等にしたほうが高い評定値が得られていた。そこで、視線を向けた相手からはどのような印象を抱かれているのかを検討し、その際の視線を向けていない相手からの印象についても確認する。

上記の検討に先んじ、会話メンバーに対して向けた視線評定量と視線を向けた相手に対して抱く印象との関係について性別を統制した偏相関分析を行った(Table 3の左列)。ただし、3者間会話場面では、視線を向ける相手は2人いるため、各会話者について2つの視線評定量と相手への印象が得られることになる。したがって、以降では、実験参加者を視線評定量数に合わせて分析する。多くの視線を向けた相手に対しては、いずれの話題条件でも、感じが良く(討論 $r=.27$, 親密 $r=.26$, いずれも $p<.10$)、高い快印象総和(討論 $r=.41, p<.01$, 親密 $r=.33, p<.05$)を示している。さらに、討論条件では、しっかりしたという印象を抱き($r=.41, p<.01$)、会話行動評価

Table 3 視線評定量と視線を向けた相手への印象および2人のメンバーから得られる印象の偏相関係数

	視線評定量と 視線を向けた相手への印象			視線評定量と そのメンバーからの印象			視線評定量と視線を向けていない メンバーからの印象		
	全体	討論	親密	全体	討論	親密	全体	討論	親密
感じが良い	.27 **	.27 †	.26 †	.23 *	.32 *	.10	.17	.34 *	-.06
健康的	.33 **	.20	.46 **	.26 *	.21	.30 *	.03	.09	-.06
外向的な	.20 †	.14	.26 †	.20 †	.15	.25 †	.12	.03 †	.22
まじめな	-.07	.01	-.14	.05	.06	.06	-.09	.10	-.23
しっかりした	.29 **	.41 **	.16	.32 **	.51 ***	.10	.26 *	.39 **	.11
話しやすい	.25 *	.20	.30 *	.17	.17	.16	.18 †	.29 †	.04
話がうまい	.22 *	.24	.19	.33 **	.26 †	.40 **	.10	.15	.03
調節	.20 †	.31 *	.04	.23 *	.29 *	.13	.24 *	.26 †	.21
好意	.31 **	.35 *	.23	.18 †	.29 *	-.01	.17	.37 *	-.19
興味	.11	.23	-.09	.15	.18	.12	.07	-.01	.21
快印象総和	.36 ***	.41 **	.33 *	.38 ***	.46 ***	.29 *	.18 †	.41 **	-.05

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$ 全体N=96 討論条件N=48 親密条件N=48

数値は、実験参加者全体では話題条件および性別を統制した偏相関係数、討論・親密条件では性別を統制した偏相関係数を示している。

においても視線を向けた相手に対して好意的な評価がなされていた(調節 $r = .31$; 好意 $r = .35$, いずれも $p < .05$)。親密条件では健康的で($r = .46$, $p < .01$)、外向的で($r = .26$, $p < .10$)、話しやすい($r = .30$, $p < .05$)という印象を抱いた相手に視線を多く向けていた。いずれの話題でも視線は好意的な印象と関連しており、因果関係を述べることは難しいが討論条件では会話に積極的な相手に対して視線が多く向けられるものと考えられる。

次に、視線評定量と視線を向けた会話メンバーからの印象について、同様に偏相関分析を行った(Table 3 の中央列)。多くの視線を向けた相手からは、いずれの話題条件でも、話がうまく(討論 $r = .26$; $p < .10$, 親密 $r = .40$, $p < .01$)、高い快印象総和(討論 $r = .46$, $p < .001$; 親密 $r = .29$, $p < .05$)が示されている。さらに、討論条件では、感じが良く($r = .32$, $p < .05$)、しっかりしたという印象が抱かれていた($r = .51$, $p < .001$)。また、会話行動評価においても視線を向けた相手からは、話をうまく調節し($r = .29$, $p < .05$)、好意的に話していた($r = .29$, $p < .05$)と評価されていた。親密条件では多くの視線を向けてきた相手に対して健康的で($r = .30$, $p < .05$)、外向的である($r = .25$, $p < .10$)という印象を抱いていた。これらは、ほぼ視線を向けた相手に抱く印象と対応しており、視線行動は話題内容によって特定の印象次元と関連しているものと考えられる。

視線配分を多くした相手からは概ね好意的に評価されるのに対し、その視線行動は必ずしも別の1人からの好意的な印象には結びつかない(Table 3 の右列)。その傾向は親密条件で顕著に見られ、有意な偏相関係数が得られなかった。しかし、討論条件では、いくつかの印象項目において有意な関連性が得られ、決して負の相関関係が示されたわけではない。また討論条件では視線配分ズレと会話満足度との間に有意傾向の偏相関係数が得られていた(Table 2)。以上のことから、議論では発言に対しての傾聴が求められる場面が多く、他のメンバーにも視線を向けることはむしろ適切な行動の1つとして解釈され、たとえ自分に視線が向けられない間でも、もう1人の他者が存在することで3者間でなされる会話自体の満足感が得られることが示唆される。

総合的考察

本研究では、2者間会話場面よりもコミュニケーション行動に統制が必要であると思われる3者間場面を用いて、会話が表出する視線行動や社会的スキルと会話者間で抱かれる印象形成との関係について検討した。3者という状況を考慮した分析を行うために、視線量だけではなく視線配分のズレの指標を作成して分析を行った。また、初対面の3者による会話という、高度な対人関係スキ

ルが求められる事態では、社会的スキルの高い人ほど2人の会話メンバーの行動をモニタリングし、コミュニケーションを調節するために視線行動を用いるのではないかと予測した。

共分散分析の結果からは、快印象総和、各印象項目のいずれにおいても視線量が多く、かつ配分のズレが少ない場合に好印象を獲得するという仮説は支持されなかった。好意的な印象を得るためには、視線配分のズレではなく、視線量の多さが有効であることが示唆された。その傾向は討論条件においてのみ認められ、特に議論という会話場面の質と関連性の強いしっかりしたという印象において有意な効果が見られた。同様に討論条件では視線量の多さが会話行動の評価も高めており、非言語的行動が印象次元に果たす役割を検討する際には、Exline(1963)やBernieri et al.(1996)が指摘するように状況や会話内容を考慮する必要性が再確認されたといえる。

しかし、仮説が支持されなかった背景には、分析対象数の問題と性差を統制したことも挙げられるかもしれない。先行研究においては性別に応じてコミュニケーション行動が異なるという指摘が数多くなされている(e.g., Carli, 1989; Hall & Braunwald, 1981)。したがって、性別を考慮に入れて、分析対象を増やした実験を行うことにより、本研究とは異なる結果が得られるかもしれない。

共分散分析による仮説の検討については支持が得られなかったが、偏相関分析の結果において討論条件では視線配分ズレが少ないほど、感じが良いという印象が抱かれる傾向が示されたことは注目すべき点である。通常、感じが良いという印象は、討論、親密のいずれにも共通な好意的評価であると考えられる。しかし、討論条件のみにおいて会話メンバーに対して均等な視線配分をすることが感じの良さにつながるということは、会話者が各々の意見に耳を傾ける姿勢を見せ、活発な議論に貢献しているというフィードバックを示してくれる相手(Kendon, 1967)に対して好意的な評価をしているのだろう。さらに、自分に視線を向けられている場合にも、視線を向けられていない場合のいずれについても視線量の多さとは有意な偏相関係数を示していることから、討論場面では積極的な視線の向け方が規範的なものとして解釈されている可能性も考えられる。

また、察しや遠慮を測定する社会的スキルに関して明白な関連性は示されなかった。ただし、ACT 尺度と視線配分ズレとの偏相関分析結果では、有意傾向ではあるものの非言語的表出性が高いほどいずれの話題条件においても弁別的に視線の配分をしている傾向が見られた。他者から抱かれる感じの良さという印象とは異なり、自己の表出レベルでは配分の調整を行うことが円滑なコミュニケーションの1つとして認識されているのかもしれない。

従来述べられている ACT 尺度の解釈との相関関係を考慮すれば、状況に応じて視線行動を調節しているという点で幾分予想に合致した結果と考察できるだろう。さらに、ACT 尺度と会話満足度、会話満足度と視線配分ズレとの間には有意な相関関係が得られていることから、討論場面で会話メンバーに弁別的に視線を配分することが表出レベルでは適切な行動として自己認知され、会話満足度につながったものと解釈できる。本研究の結果では、視線配分のズレという指標が、会話者本人においては満足感につながるが、他者からは感じが悪いという印象を抱かれるものとして働いていた。したがって、視線行動を含め、どのような言語・非言語的行動が自己認知と他者認知の乖離を埋めるものとして有用なのかを検討する必要があるだろう。

社会的スキルに関して期待したほどの効果が得られなかった理由として以下の2つの点が挙げられる。まず、実験デザインとして、3者の社会的スキルないし非言語表出性の組み合わせの問題点を指摘できる。Exline(1963)の実験からは3者のパーソナリティと状況の組み合わせが視線行動の解釈に影響を与えることが見出され、大坊(1978)においては3者の不安水準が言語活動性に影響を与えていた。したがって、本研究では社会的スキルの組み合わせが考慮されていないために、視線行動の影響が相殺されてしまった可能性は十分考えられる。今後の研究においては、社会的スキルについて事前の要因配置を施すことが望まれる。第2の問題点として、社会的スキルと状況に適切な視線行動とは必ずしも線形関係ではなく、逆U字の関係を有している可能性を挙げられよう。過度に高い社会的スキルが必ずしも円滑な対人関係をもたらすわけではない。例えば、自己主張をさげ、遠慮や察し過ぎによる欲求・感情の抑制が責任回避などの問題を引き起こす場合もある(大坊, 2003)。したがって、社会的スキルを要因として扱う場合には相関分析以外の分析手法も加えねばならない。また、自己報告の社会的スキル尺度のみでなく、第3者評定や解釈実験などによる社会的スキル測定との併用も解決策として挙げられるだろう。

視線を向けた会話メンバーからの印象評定は概ね好意的に評価されていた。また、討論条件のみであるが、視線を向けていない相手からの印象も、視線行動とは正の相関関係が得られており、Exline(1963)で指摘されるような脅威をもたらすようなネガティブな視線行動ではなく、ポジティブな機能が果たされていたものと考えられる。しかし、話し手に置かれた場合の一瞥は発話の終止符の合図や強調の機能を担い、聞き手に置かれた場合の視線行動は関心や意欲、発話の促進の機能を担うように(Argyle & Cook, 1976)、視線行動の種類と機能は聞き

手、話し手の立場によって多様に変化する。また、発話のターンとも深く関わりがあることが指摘されている(Kendon, 1967)。これについては、視線行動の実測値を測定し、発話行動との対応による分析を加えることで様々な視線行動の機能の把握が可能になると思われる。さらに、本研究と同一データを用いた分析から得られたうなずきの機能の知見(磯・木村・桜木・大坊, 2003)と併せてマルチチャンネル・アプローチによる検討を試みることで、3者間場面における言語・非言語的行動と対人関係とのダイナミズムを実証的に探ることができるのではないかと考えられる。

註

- 1) 本研究は日本学術振興会科学研究費補助(基盤研究C、14510137、代表:大坊郁夫)を受けて行われた。
- 2) 本研究の一部は日本社会心理学会第44回大会において発表された。

引用文献

- Argyle, M. 1988 *Bodily communication*(2nd ed.) London: Methuen.
- Argyle, M., & Cook, M. 1976 *Gaze and Mutual Gaze*. Chambrige: Chambrige University Press.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Argyle, M. & Ingham, R. 1872 Gaze, mutual gaze and proximity. *Semiotica*, 6, 32-49.
- Bernieri, F., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. 1996 Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 110-129.
- Carli, L. L. 1989 Gender Differences in Interaction Style and Influence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 565-576.
- 大坊郁夫 1978 3者間コミュニケーションにおける対人印象と言語活動性 実験社会心理学研究, 18, 21-34.
- 大坊郁夫 1991 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.
- 大坊郁夫 2003 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築— 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- Exline, R. V. 1963 Exploration in the process person perception: visual interaction in relation to competition, sex and need for affiliation. *Journal of Personality*, 31, 1-20.
- Hall, E. T. 1976 *Beyond Culture*. N.Y.: Anchor Pres
- Hall, J. A. & Braunwald, K. G. 1981 Gender cues in conversations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 99-110.
- 磯友輝子・大坊郁夫 2003 自己の態度に反した説得場面における言語的・非言語的行動の研究 第11回社会言語科学会研究大会予稿集, 67-70.
- 磯友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 2003 発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響—3者間会話場面における非言語行動の果たす役割— 電子情報通信

- ン 石井敏・岡部朗一・久米昭元 異文化コミュニケーション 有斐閣 Pp.121-140.
- Kendon, A. 1967 Some function of gaze direction in social interaction. *Acta Psychologica*, 26, 22-63.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 2002 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 日本感情心理学会第 10 回大会
- Lesko, W. A. & Schneider, F. W. 1978 Effects of speaking order and speaker gaze level on interpersonal gaze in triad. *Journal of Social Psychology*, 104, 185-195.
- Mills, T. M. 1953 Power relations in three-person groups. *American Sociological Review*, 18, 351-357.
- Özyürek, A. 2000 The influence of addressee location on spatial language and representational gestures of direction. In D. McNeill(Ed.) *Language and gesture*. N.Y.: Cambridge university press. Pp.64-83.
- 小川一美 2000 初対面場面における 2 者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 173-183.
- パターンソン, M. L. 工藤力(監訳) 1995 非言語コミュニケーションの基礎理論 誠心書房 (Patterson, M.L.1983 *Nonverbal Behavior : A Functional Perspective*. N.Y.:Springer-Verlag N. Y.)
- Takai, J. & Ota, H. 1994 Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.

The effects of gaze on impression formation: The role of nonverbal behaviors in a triadic communication

Yukiko ISO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
 Masanori KIMURA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
 Akiko SAKURAGI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
 Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This study investigated the effect of gazing on impressions of interactants in same-sex triadic communications. 48 university students (18 male, 30 female) who were not acquainted with each other participated in either the cozy conversation or the discussion about a social problem. We hypothesized that giving both a larger amount of gaze and the balanced gaze between interactants would lead to receiving favorable impressions, but they were not supported. However, in the discussion condition, a large amount of gaze led to favorable impressions, whereas the balanced gaze correlated positively with pleasant impressions. Furthermore, the balanced gaze had a tendency of receiving positive correlation with ACT, independent of conversation conditions. The importance of conducting future studies on focusing the role of gaze, correspondent with speech pattern was discussed.

Keywords: triadic communication, gaze, impression formation, rapport.